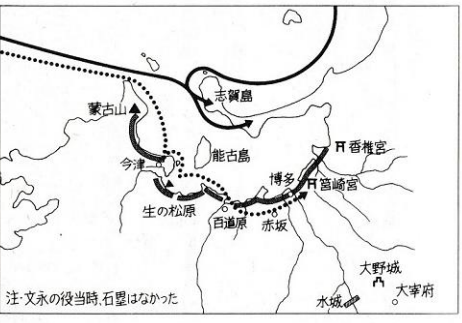
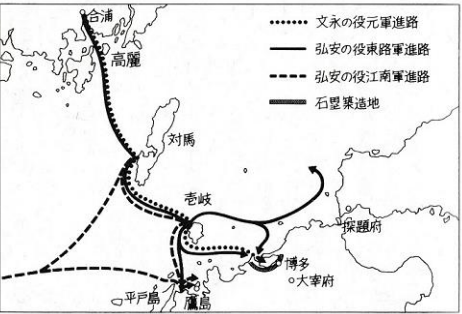
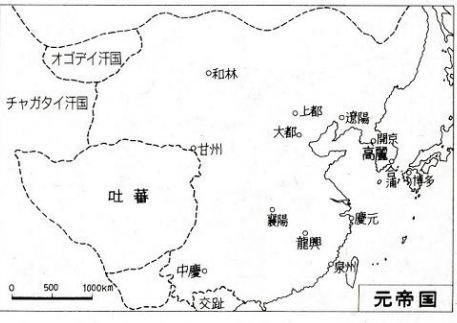
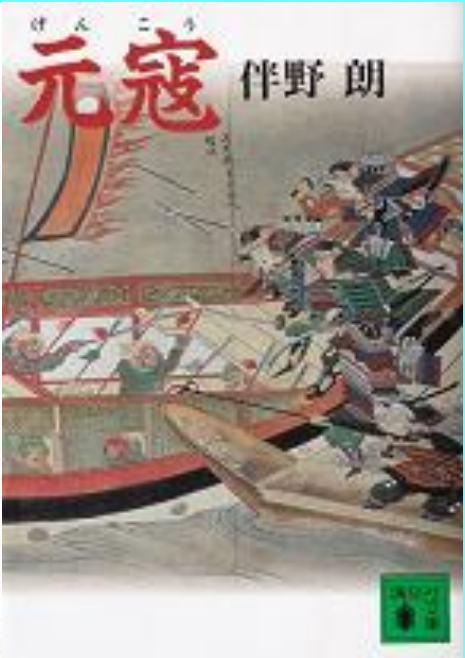


伴野朗著『元寇』(講談社文庫)の一部



プロローグ

十一月の末というのに、なんとこの暖かさだろう。その上に、快晴。蒼穹には、一点の雲もな。颯やかな衣舞。まるで鏡のようだ。天と海が混然一体となった水平線。そこに、かすかに見えるのは、対馬である。眼を一八〇度転すと、伊万里湾に連なる内海が光っている。この小島の最高地点で、海拔百十七メートル。平和なたたずまいが、美しい白泉のなかに息づいていた。

長崎原北松浦郡鷹島町は、元寇の島として知られている。元史では、「五龍山」という名で登場する。いまを去ること七十九年前の文永十一年(一二七四年)十月、高麗を率いた元軍が、この島を襲った。モンゴル、女真、漢人と高麗の混成軍であった。対馬、忠威を襲撃したあと

での襲撃であった。殺戮と略奪が繰り返され、生き残ったのは、島民の老婆二人だけだった、と伝えられている。さらに七年後の弘安四年(一二八一年)七月、またも元軍が襲来した。元には滅ぼされた北部に残る。地獄倉、血浦、首崎、生死符、などのおぞましい地名が、血生臭い当時の事情をかりうじて伝えている。「江南軍」は、高麗から発した「東路軍」と合流して、博多、太宰府方面へ総攻撃をかける時、七月晦のこの夜半、九州北部一帯を激しい暴風雨が襲った。

と呼んだ。私は、その光景を思い浮べようと努力していた。だが、眼前にはまったく対照的な平和な風景が広がっている。私は眼を閉じた。それでも、その時、この海域で起ったであろう地獄絵図を頭に描くことは、困難な作業であった。科学と資料の力を借りなければな

この夜の台風規模を測定した人がいる。真鍋大覚・九州大学教授である。真鍋教授が着目したのは、東京・上野の国立科学博物館にある樹齢八百年の屋久杉の標本であった。この杉の半径は平均六十九センチ、中心部は太治十五年(一二三〇年)、外皮部は昭和十五年(一九五〇年)と推定されている。その中心から十二・六四センチの位置に幅二・二二センチの亀裂を伴った斑点群が十一個、輪状に並んでいる。年輪から推定して、これが弘安四年七月の台風によるものと考えられた。斑点群が年輪全周に沿って一樣に分布していることから、この台風の中心は、屋久島の至近距離を通過した、と思われた。真鍋教授はこれまでに発生した台風が、杉の生長に及ぼした年輪変化の数値を分析し、この時の最大瞬間風速を五十五・六メートルと算定した。この風速だと、中心示度九五〇ミリの超大型台風ということになる。これは、数十年に一度という超大型で、当時の防災技術では避けようのない、モンスターであった。この超大型台風が到来したことの偶然性を、どう考えればよいのか。それは、ともかく。

気象庁の観測記録によると、中心示度九五〇ミリの台風が、九州の南方二百キロの海上に達した時、中心から北六百キロの対馬以南の海上は、秒速十五メートルの東風が吹く。屋久島付近で中心示度九五〇ミリの超大型台風ならば、三百キロ北の鷹島周辺は、完全に台風圏内に入り、瞬間風速は二十メートル内外の北東風ないし北風が吹き荒れていた筈である。

そして、台風のコースが、九州南の海上から九州西岸をかすめ、あるいは西の海上を北上した場合、常に大きな被害が出るという経験則がある。このようなコースをとった台風は、昭和十五年の第四〇二号台風、同十九年のジュデス台風(第四九〇九号台風)がある。前者は中心気圧が九六〇ミリバールで、九州西の海上を北上した。後者は、二十四時間九州西の海上に停滞したのち、一気に東に走り去っている。台風の時期的関係については「八幡愚童記」に、

一程に、後の七月九日戌の夜、西國の早馬付きて申して云ふに。去七月晦夜半より戌亥時まで風おひたし吹きて、七月一日は賊船悉く漂蕩して海に沈みぬ。とあり、七月晦夜半(閏七月一日午前零時)からその夜の戌亥時(閏七月一日午後九時)まで台風が吹き荒れていたことを示している。台風は二十時間も停滞、猛威を振っていた弘安四年七月二十九日夜から閏七月一日にかけて、鷹島一帯を襲つたいわゆる「神風」の正体が見えてきた。屋久島付近から九州西岸をかすめて北上した超大型台風は、少なくとも中心示度九六〇ミリの勢力を維持しながら、伊万里北西の海上に達した。最大瞬間風速は五十メートルを超えた。

阿鼻叫喚。海は荒れ狂い、すべてのものを呑み込んだ。台風の猛威は、なんと一昼夜も続いたのである。やがて、台風はジェット気流に乗り、東へ向きを変え、一気に近畿地方へ走り去った……。そして、鷹島周辺の海上には、前述した如く日本攻略を目指す元軍十四万人を乗せた四十四隻の軍船がいた。ひしめき合うように集結した軍船が、凄まじい風濤に弄ばれていた。ある船は山のような圧倒的な波浪の前に打ち砕かれ、あるいは船同士が衝突して、なすすべもないまま沈んでいく。波間に助けを求めて叫ぶ兵士たちの声。それは風波の音に掻き消され、一人、また一人と海底に呑み込まれて消えていく……。一台風の去ったあと、十万人近い死体が海底や島の浜辺を埋め尽し、処理する者もいなかった、と記録されている。以後、約百年にわたって、鷹島は、その屍臭によって、人が住むことがなかったという。

私は、眼をあげた。光に輝く海があった。一隻の漁船が、白い軌跡を残して走り去ろうとしている。カモメが舞っている。一羽、二羽、三羽……。平和な風景。これ以上望めないような平和。七百年の歳月が、屍臭の場を光り輝やかに、限りなく平和な島に変えていた。海を見て、癒しただけが癒った。

日本攻略を号令したのは、元帝国の世祖フビライである。だが、元との交渉の機会は多々あったのだ。日本はすべてを無視し、交渉のテーブルにつこうしなかった。本当は、この戦いは避けることができたのではないかと、思う。そのところが明確に見えてこないのは、日本の視点のみで書かれた「元寇神話」のためではないだろうか。その代表の一つが、頼山陽の『羣芳譜』である。明治維新の志士たちに愛誦され、「元寇神話」の基礎をつくりあげていった。

それはさらに、小学唱歌「元寇」となった。「鎌倉男子」北条時宗の勇気、挙国一致、そして、神風が、「元寇神話」の根底にあり、それは安易な「皇国史観」に結びついた。確かに日本は、元の侵略を二度にわたってはね返すという奇跡をやつてのけた。飛びきり幸運な気象条件に恵まれたものであったが、それは、紛れもない事実なのだが……。南京に日中戦争時の「南京虐殺」を記念した展示館がある。正式名称は、侵華日軍南京大屠殺遭難同胞記念館である。この館名を挿入したのは、最高実力者鄭小平氏である。この記念館を訪れたのは、開館して間のない一九八六年の夏であった。「南京虐殺」の有無、是非を論ずるつもりはない。見終わった正直な印象は、被害者の倫理でのみ語られている。ことだった。そして似ているな、とも思った。広島、長崎で見た原爆記念館の一連の展示。被害者のみの視点で語られ、加害者の視点がとくに欠落している。その是非を問うつもりもない。ただ、客観的事実として提示してみたい、とさえいいた。そういう意味で、この元寇の物語を、主に大陸からの視点で書き綴つてみたい、と思つて

いる。